

どこの馬の骨は人間の方が 牛門の名家は種つけ先まで

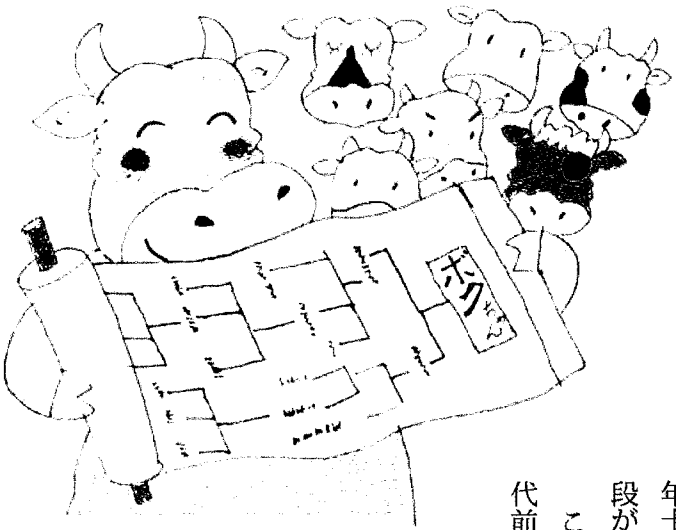
“親がいなければ、子は生まれぬ”この至極当たり前な事実から、遠く人間の先祖をさかのぼると、世にも不思議な数字が成立する。

つまり、一人の人間には必ず両親が存在したはずだから、こうして順次、親をさかのぼって行くと、十代前の先祖は千二十四人。しかも、それら全部の親を合わせると二千四十八人もの大部隊となる。

だから、あなたが“自分の家柄を誇ろうとする”なら、これら二千四十八人のすべてについて、その“由緒”の正しさを証明しなければならないはずで、かつての一時期、ブームになった“ルーツ探し”が案外早く下火になったのはこの至難さのためである。

ところで、松阪牛や神戸ビーフのブランドで知られる“但馬牛”の場合、たいていの牛は、五六代先ぐらいまではつきり先祖がわかっているといい、どこの馬の骨だか素性がわからないのはむしろ人間さまの方がもしれない。

さる昭和五十二年、一頭の牛が、松阪牛のチャンピオンとして全国的な話題となったが、この黒毛和種のメス牛は、名まえを「たけ」といい、昭和四十九年三月二十日、兵庫県城崎郡竹野町で生まれた。



たけは、生後九か月で三重県の肥育農家に引き取られ、二年十か月ののちに競りにかけられて、当時としては最高の値段がついた。

この「たけ」には、全国和牛登録協会の発行した、七、八代前までの“身元証明書”があり、父親の「奥秀」は、サシの入りやすい血統としてこの世界では“名門”中の名門。

昭和四十六年からの五年間に、延べ四千七百六十九頭ものメス牛に種つけたことが記録されている。

「たけ」はその中の一頭で、ここでも、人間は“モ―負けそう”。